

ジジに弾くピアノ

小松 海琉

カーネルサンタースによく似ているジジは日本人離れした大きな体型に白いひげ、小さい頃迷子になっても遠くからすぐに見つけることができた。そのたつぷりとしたお腹の上に頭をのせると、トトロの上で寝ているようで、温かく穏やかな気持ちになり、すくにはくは夢の中だった。

やさしく、どんな時でも受け入れてくれる存在で、お母さんに怒られるとすぐにジジの元に逃げ込んでしまう。嵐の中、大木の穴に小動物が避難するように、お母さんという嵐が去るのを、ジジの後ろでじっと待っているほく。そしてお母さんの言うことも、ほくの言い分もじつくり聞いて、ゆつくりほくの間違いをさとし、謝るきっかけまで作ってくれる人。

似顔絵を描いてくれたり、よく飛ぶイカ飛行機の作り方を伝授してくれたら、コマの回し方、蟬の捕まえ方など、昔の遊びをじつくり教えてくれる先生でもあった。一人っ子のほくには両親とはまた違う特別な人、いつも、ほくの味方で、やさしく受け止めてくれる。

ジジの部屋からはいつもクラシックが流れていた。目を閉じて気持ち良さそうに聴いているところに、ほくが入って

くとベーターペンやモーツアルトの話をしてくれた。初めて買ってくれた絵本もベーターペンだった。五歳のほくには難しかったが、何度も繰り返し読んでくれて、ベーターペンという音楽家をジジはかなり好きなことが、小さいながら理解できた。だから大好きなジジにベーターペンのピアノソナタを弾いてあげたくてピアノを習い始めた。

いつかほくの弾くベーターペンピアノソナタを、うっとり聴き入ってくれる姿を夢みて、練習して六年、やっとベーターペンまでたどり着いた。それなのに、大きくてほくにとつて目標だったジジは、あっさりとは病気に負けて小さな白い箱になって帰ってきた。

両親に頼んで、その小さな箱をピアノの隣に置いてもらうことにした。みんなはびつくりするがまったく怖くはない。だってジジだから。その箱に今日もまだまだのベーターペンを聴かせる。うっとりするまで。

今でもジジのことは、忘れない。幼かったほくにやさしく、丁寧にいるんなことを教えてくれたジジに「ありがとう」を言い続けたい。